

課題別分科会 第3分科会

指導助言者

菅原悦子先生 岩手大学教育学部 教授

千田満代先生 県南教育事務所 指導主事

家庭A 家族と家庭生活

1. 研究部基調提案

県研究副部長 村上智子 (盛岡市立大宮中学校)

2. 実践発表

(1) 紫波地区 田中留美子 (矢巾町立矢巾中学校)

(2) 宮古地区 大久保玲子 (宮古市立新里中学校)

家庭B 食生活と自立

1. 基調提案

県研究副部長 岩渕未央 (矢巾町立矢巾北中学校)

2. 実践発表

(1) 盛岡地区 阿部和 (盛岡市立仙北中学校)

(2) 九戸地区 伊藤由香 (久慈市立長内中学校)

第3分科会

A 家族・家庭と子どもの成長

B 食生活と自立

運営責任者 村上 智子(盛岡・大宮中)
司会者 渡辺 ちひろ(岩手・沼宮内中)
記録者 山口 祐佳(一関・一関中)
参加者数 30名

1 はじめに

本分科会では、A「家族・家庭と子どもの成長」とB「食生活と自立」に関して、研究部から県研究主題の副題「共に学ぶ活動」に基づいた基調提案と5地区から実践発表をしていただき、今後の研究が深まる実践交流が行われた。

2 発表の概要

(1) A「家族・家庭と子どもの成長」

① 県研究部基調提案

本県研究主題に迫るために、「共に学ぶ活動」を学習活動の各場面において、授業の中でどのように位置づけるか、また、その学習活動によって、生徒の変容をみとめるための学習シート、および自己評価(表現)の進め方についての授業実践が提案された。

ふれ合い体験学習のふり返りの授業において、研究のねらい「共に学ぶ活動」を学習課題の各場面において、授業の中でどのように位置づけるかについては、個で考えたものを小集団で発表、個人の振り返り、全体で共有する形をとった。また、生徒の変容をみとめるための学習シートの検討では、「あそび」「人との関わり」に絞ることでお互いの考えが深まりやすいようにした。また、学習シートに記入するとき幼児に対する見方でわかったこと、気づいたことという視点を与えて記入させ、視点を与えることで考えを深めることを意識した。自己評価(表現)について、生徒のプリントの記述から実際に幼児とふれ合い、気づきや考えを共有できたことで、考えを深めた生徒が多く、自己の生活に生かすように振り返りができた。また、話し合いの的を絞ったり、視点を与えることも効果的だった。

今後は、さらに「共に学ぶ活動」を通して、

自他の比較がしやすい学習シートの工夫を進めていきたい。

② 紫波地区

幼児の食事の特徴や保護者からのアンケートを基に「幼児に相応しいおやつ」について考え、実習を行い、さらに家庭で実践させる。学んだ知識・技術を生活で活用するための題材として「幼児のおやつ実習」に取り組んだ。

③ 宮古・下閉伊地区

1年生は家庭新聞作成、2年生はアメリカの研究者による家事労働に関する研究資料をもとに、家族と家庭の機能を考えさせ、3年生では先生へのインタビューを通して、自立と共生の視点で生き方を考えさせる授業という題材配列を工夫し、3年間を通して、目指す生徒の姿に近づけるように指導の道筋を考えた。

(2) B「食生活と自立」

① 県研究部基調提案

「共に学ぶ活動」について、生徒同士の学びあいだけでなく、視野を広げて専門家その道のスペシャリストの話聞き、そこから学び合う、あるいは調理実習や調理実験等において学び合い、科学的に捉えてより確かな知識・技術として身につけることが出来るように。また、自分以外の他者との関わりの中でより広い視野を持ち、より良い生活を求めて実践する力を育てていくためにどのような「共に学ぶ活動」ができるのか、「共に学ぶ活動」が、どのような力を育てるために設定しているのか整理をした。また、学習シート1枚で題材を通しての変容をみとれる工夫を行った。今後は、意識の変容が可視化するような学習シートの工夫をさらに行っ

ていきたい。

② 盛岡地区

調理に関わる実践交流ということで、調理実習で扱うもの、時間、実習形態等の情報交流、授業実践の交流を行った。交流をすることで、新たな発見もあり、授業作りの意欲にもつながった。

③ 和賀地区

共に学ぶ活動をどの場面に用いれば、生徒の実践力を育むことができるか、今までの実践を整理し、授業改善を行った。生徒同士の学び合いと家庭や外部講師との学び合いが生徒の意欲向上につながった。

④ 九戸地区

自分の生活に興味・関心を持ち、自分の考えを持って生活をよりよくしていこうとする生徒の育成を目指し、話し合い活動場面の設定と共有化、ユニバーサルデザインの視点からみんながわかるワークシート、板書の工夫、考えを1つにまとめる焦点化というパターンを決めて授業を行った。今後、30年久慈大会に向けて検討を重ねていきたい。

3 討議の内容

保育実習をどのような形で実施し、まとめているのか、各グループで交流を行い、全体で共有した。

保育実習の実施については、ほとんどの学校において実施されているようだ。ある地区では「命を大切にす」という市のバックアップがあり、市内保育園、幼稚園全て受け入れ体制ができているようだ。しかし、中には学校規模が大きくなると受け入れてもらえず苦勞されている学校もあるようだ。また、市で企画されている「赤ちゃんふれ合い体験」に参加するなどの工夫をされている学校もあった。保育施設に向くだけでなく、学校に招待するという形もあるようだという紹介もあった。

保育実習の実施時間は、家庭科の時間での実施の他、総合的な学習の時間で実施、幼児についての学びは家庭科で行い、実習は総合で実施、

実習は総合で行い、まとめは家庭科で実施する学校と様々であった。

保育実習実施後のまとめ方については、レポート、ハガキ新聞で振り返りを行っている学校が多く、実習での気づきを交流することで考えを深め、新たな視点に気づかせる工夫がされている。

4名の高校の先生方の参加があり、高校での実践を紹介していただきながら交流を行った。その中で中学校での学びが高校へつながっているという事例もあり、小、中、高の連携の必要性があることを改めて感じた。

4 助言

岩手大学 副学長 菅原悦子先生

- ・家族と家庭生活において、改めて中学生の頃からこのような学びをしっかりと行い、子育てに対して理解のある子どもたちを育てていかないと、今の社会の中で少子化が進み、いろんなところで問題を抱えることになる。これからの先生方の支援をお願いしたい。
- ・食生活の自立において、健康教育だけではなく、生活文化の歴史もとても大事である。郷土料理は作り方を学ぶのではない。食の匠の人たちは地域の人たちに作り方（技術）を教えますが、中学校で教えている食文化は単純に調理実習を行うだけではない。そこを考えていかないと。
- ・家庭科の食生活分野において栄養教諭、食の匠の方たちとの関わりの中で、その方たちをどう、どこで共に学ぶか。家庭科教師が何のために来ていただいて授業をすることが、子どもたちにどのような効果を生むのかを考えながら授業を組み立てることが大事である。先生方が主体的になり、家庭科としての食生活、子どもたちに食生活の自立をどう教えていくか考え、特色のある授業を自信をもって行って欲しい。

県南教育事務所

指導主事 千田満代先生

- ・小中高の学習指導要領を学んだり、どうしているのか実態を把握することが大事。小中高の系統をしっかり意識してほしい。
- ・県の提案について、「知識・技能を身につける段階」「思考力・判断力を養う段階」「学びに向かう力・人間性を育てる段階」の3つの柱がある。この3つの柱は充分新学習指導要領に寄り添っている。地域に踏襲して欲しい。今回県から提案していただいた流れも取り入れていただき、研究を来年度すすめて欲しい。
- ・ふれ合い体験で中学生が面倒を見る立場を経験することで自己有用感を持てることをねらっている。だからなかなかできないという学校、学校事情でできないということは非常に残念なこと。学校の都合でできないではなく位置づけられているのだから、ふれ合い体験はぜひやっていただきたい。
- ・今の子どもたちは自己肯定感、自己有用感を持っていないという現実があるので、家庭科教育の中で持たせてあげたい。
- ・ミシンを使うとか、だしをとるとかいう生活文化の継承という家庭で今までやってきたことがやられていない。ミシンを家庭で使っている様子がない。それをわざわざ学校で行う。これが生活文化の伝承。これが現実。調理をするという技術を習得する場所が家庭科だということが悲しい現実であるが、そういう使命を受けて指導しているというように逆に誇りをもって授業をしていただければと思う。
- ・新学習指導要領小学校32年度、中学校33年度全面実施ですので来年度から動きださなければならない。

5 まとめ

新しい研究主題で研究がスタートして迎えた初めての県大会。高校の先生方が参加され、高校での家庭科の授業の様子等を聞くことができ、改めて小中高の系統性について学んでいかなければならないと感じた。また、幼児のふれ合い体験の様子を交流し合うことで、本県の幼児とのふれ合い体験の実態を知ることができた。

各地区の実践は、研究副主題「共に学ぶ活動」を意識した授業実践が多く学びが多かった。

「共に学ぶ活動」をどの場面に取り入れると効果的か、話し合い活動の充実のための工夫、生徒の思考の変容が見える学習シートの工夫など今後も実践を重ね、研究テーマに迫るよう取り組んでいきたい。